

3. 取り巻く歴史環境

3-1 大洗町の成り立ち

大洗町の行政区域を紐解いてみると、幾つかの段階が存在する。

『常陸国風土記』に拠れば、大化五（649）年、那賀の国造の領地であった、鹿島灘沿いの寒田（現在の鹿嶋市・神栖市境付近）から北の里五つなどを分割して、香島の神の郡を置いている。この古墳時代終末期の7世紀の中頃に、大洗町域も那賀郡から香島郡に分かれた可能性があるが、その境界は定かではない部分がある。大洗町域に面する那珂川水系の河口域付近を阿多可奈湖あとかのみなとと呼んでおり、面した平津（現在の平戸付近）の存在より、那珂川水系の河口域が、水運で開けた港津として機能していた様子が浮かび上がる。

870年代に成立した『日本文徳天皇実録』には、斉衡三（856）年、「鹿嶋郡大洗磯前」の記録があり、町の北部が平安時代前期には鹿嶋郡に帰属し、町名の大洗が、1,150年以上前に成立していたことを知ることができる。10世紀前半に成立した『和名類聚抄』に拠れば、平安時代には、古代鹿嶋郡に帰属する町北部の宮田郷と南部の大屋郷とがある。宮田郷は潤沼川に面する字宮田の遺称地が残り、大洗磯前神社に献ぜられた神田に由来すると考えられる。大屋郷は、現在の大貫町神山町境の千天遺跡から奈良時代の「大屋厨」を墨書した須恵器坏が出土しており、奈良時代には、町の南部を大屋と呼んでいたことが物証から証明された（（公財）茨城県教育財団 2014 『千天遺跡』）。

大貫町の一部である木下りおろしも度々登場し、大永六（1526）年の『亀山村不動堂勸進疏』には、「材を取る舟は木下の岸に着き」とあり、大洗磯前神社の勸進にあたり、大貫町の潤沼川沿いが木材の流通の結節点として機能していた姿が描かれている。永禄年間（1558～1570）の『鹿島神宮所領日記』には、「大貫かう（大貫郷）」、「かミ山かう（神山郷）」が登場し、中世の16世紀代になると、大洗町南部の地名が現在とほぼ同様に整ってくるようである。神山は亀山とも表記され、それとは区別される夏海の地名が登場するのもこの頃である。文禄三（1594）年の検地を示した『文禄検地郡村統属』には、宮田・大貫・神山・夏海（後の成田）の四村が、佐竹領の茨城郡に編入され、この郡域は江戸時代に入っても正保国絵図などに継続する。元禄国絵図の完成により茨城郡から鹿島郡に編入された（海老澤正孝 2021 「大洗地域の郡と行政区画の変遷」『大洗の本 第2号』）。

江戸時代前期になると、イワシ漁など、外洋の地先漁業が発達し、現在の商店街を中心とした磯浜の市街地が整備され、それまでの古代以来の宮田村から大洗海岸の岩礁に由来する磯、磯ノ浜、磯浜への町名変更がおこる。発達した磯浜市街地では、大洗磯前神社の参詣、磯浜潮湯治から近代海水浴への観光業の勃興と発展、祝町の花柳界で生まれ育つ民謡の磯節など、海との関わりの中で、近世から近代にかけて多様な地域文化が花開くことになる。

昭和29年11月には北部の磯浜町と大貫町が、その翌年には南部の神山町・成田町も合併し、大洗町が誕生する。この度、町政約70年を経過し、町の代表的な文化財である史跡磯浜古墳群を対象とした保存活用計画の策定を行うことにより、この土地の歴史や文化について、向き合うことになったのである。

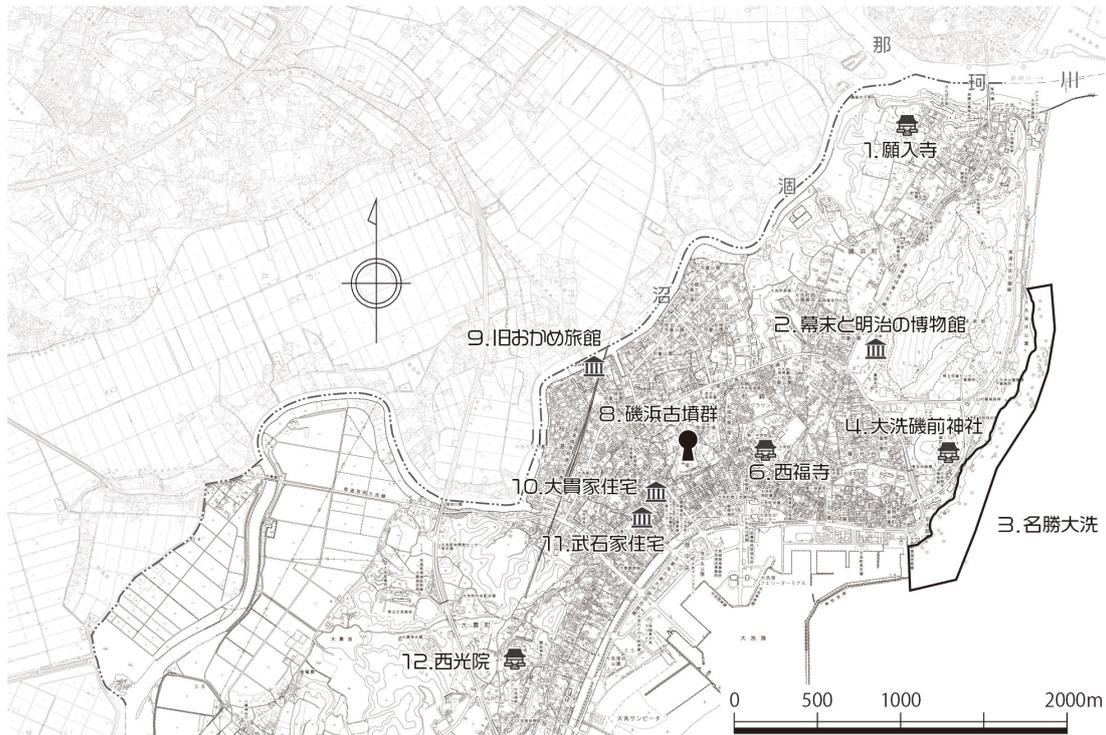


図 2-12 指定・登録文化財

3-2.大洗町の文化財

大洗町には、文化資源や歴史資源と言い換えることもできる、多数の文化的所産が存在する。中でも、歴史上又は芸術上価値の高いもの、重要なものについては、国の文化財保護法、及び茨城県文化財保護条例、大洗町文化財保護条例の規定に従い、指定、あるいは登録し、後世に残す策を講じている。大洗町では、別表の通り、国・県・町指定等を合わせ、総数 34 件にのぼっている。その内容も固定化したものではなく、調査研究の深まりによって評価され新指定されたり、県指定や国指定に昇格したりする場合もある。令和 2 年 3 月に国指定史跡となった磯浜古墳群(8)も、永年、県指定史跡であった日下ヶ塚 1 件と同車塚 1 件を合わせ、古墳群として再評価されたものである。

多くの指定文化財は、古代～中近世に創建された、大洗磯前神社 (4) や西光院 (12)・願入寺 (1)・西福寺 (6) などの社寺を中心に保管されている。近世建築の建造物の他、本尊などの仏像、収蔵品である工芸品・書跡・古文書・絵画などの多岐にわたる物件 (1-1～1-10・4-1～4-3・6-1～6-4・12-1～12-3) が、その価値の評価を受けている。

この他に、大洗町教育委員会が所蔵・管理する、弥生時代の青銅製品である巴形銅器を中心とした一本松遺跡出土遺物 (7-1) のような先史遺物が県指定考古資料として評価されており、磯浜古墳群周辺についても時代的背景や周辺遺跡の展開などについても、注意を払う必要が出てくる。

番号	指定・登録	種別	名称	数量	所有者・管理者	指定・登録日
1-1	県指定	絵画	親鸞聖人画像	1幅	願入寺	S47.12.18
1-2	県指定	彫刻	木造 阿弥陀如来立像	1体	願入寺	S47.12.18
1-3	県指定	工芸品	香合	2個	願入寺	S47.12.18
1-4	県指定	工芸品	朱漆塗 蔦葛模様椀	5個	願入寺	S47.12.18
1-5	県指定	書跡	唯信鈔断片	1幅	願入寺	S47.12.18
1-6	県指定	書跡	蓮如筆 消息大根田御坊宛	1幅	願入寺	S47.12.18
1-7	町指定	建造物	願入寺山門	1基	願入寺	S50.7.10
1-8	町指定	絵画	尾方光琳筆襖絵	1帖	願入寺	S50.7.10
1-9	町指定	彫刻	如信上人座像	1軀	願入寺	S50.7.10
1-10	町指定	古文書	二十四輩牒	1巻	願入寺	S50.7.10
2-1	県指定	工芸品	扇散蒔絵書棚	1架	幕末と明治の博物館	S46.12.2
2-2	県指定	工芸品	短刀	1振	幕末と明治の博物館	S47.12.18
2-3	町指定	絵画	借楽園図	1幅	幕末と明治の博物館	R3.9.24
2-4	町指定	絵画	好文亭四季模様之図	1幅	幕末と明治の博物館	R3.9.24
2-5	町指定	彫刻	銅造明治天皇立像	1軀	幕末と明治の博物館	H15.7.30
2-6	国登録	建造物	幕末と明治の博物館別館	1棟	幕末と明治の博物館	H17.2.9
3-1	町指定	名勝	大洗	1件	茨城県	H21.1.20
4-1	県指定	建造物	大洗磯前神社拝殿・本殿	2棟	大洗磯前神社	S45.9.28
4-2	県指定	工芸品	太刀(銘常州水戸住藤原近則)	1口	大洗磯前神社	H2.1.25
4-3	町指定	建造物	隋神門	1基	大洗磯前神社	S62.5.1
5-1	町指定	古文書	税所文書	86点	個人	H29.2.24
6-1	県指定	彫刻	木造 阿弥陀如来坐像	1軀	西福寺	S44.3.20
6-2	県指定	彫刻	木造 阿弥陀如来坐像(胎内仏)	1軀	西福寺	S44.3.20
6-3	県指定	彫刻	木造 觀世音菩薩立像(胎内仏)	1軀	西福寺	S44.3.20
6-4	県指定	彫刻	木造 勢至菩薩立像(胎内仏)	1軀	西福寺	S44.3.20
7-1	県指定	考古資料	一本松遺跡出土遺物	13点	町教育委員会	H23.11.17
8-1	国指定	史跡	磯浜古墳群		管理者 大洗町	R2.3.10
9-1	国登録	建造物	旧おかめ旅館本館	1棟	個人	H19.10.22
10-1	国登録	建造物	大貫家住宅主屋	1棟	個人	H18.3.2
11-1	国登録	建造物	武石家住宅主屋	1棟	個人	H17.2.9
11-2	町指定	天然記念物	三尺藤	1株	個人	H26.7.23
12-1	県指定	絵画	絹本着色 金剛界大日如来画像	1幅	西光院	S44.3.20
12-2	県指定	彫刻	木造 阿弥陀如来立像	1軀	西光院	S44.3.20
12-3	県指定	天然記念物	お葉付イチヨウ	1株	西光院	S37.2.26

表 2-1 指定・登録文化財一覧

3-3.磯浜古墳群と周辺の遺跡

大洗町の所在する遺跡は、令和5年4月1日現在、総数107か所を数え、旧石器時代から江戸時代に至る集落跡、貝塚、古墳、城館跡などが確認されている。約1割の遺跡は太平洋を直接臨む台地東縁に営まれているが、他の遺跡は那珂川・澗沼川に直面する台地上か、澗沼川に流れ下る小河川に臨む台地縁辺に位置している。磯浜町のゴルフ場内、成田町の国立研究開発法人日本原子力研究開発機構敷地内や山林内は把握が困難なため、遺跡の実数は増加するものと考えられる。

旧石器時代の遺跡は、ドンドン山遺跡(遺跡番号3)のと磐船山遺跡(4)の2遺跡が確認されており、町の北端に偏る(藤本(弥)1980a・1980b、藤本(武)1993)。両遺跡合わせて、10点ほどのナイフ形石器等が採集されている。

縄文時代の遺跡は、二葉町遺跡(8)、白畑貝塚(19)、吹上貝塚(18)、大貫落神北貝塚(46)、大貫落神南貝塚(47)、一本松遺跡(21)、千天遺跡(75)、おんだし遺跡(95)等が存在する。二葉町遺跡は早期を中心とする遺跡で、各期の遺物が採集されている(大内 1970)。前期関山式期の白畑貝塚は、未調査の遺跡であるが、2地点からなり、ヤマトシジミが濃密に分布する(井上 1987、藤本(武)1994a)。吹上貝塚はA~Dの4地点からなり、台地上と斜面に形成

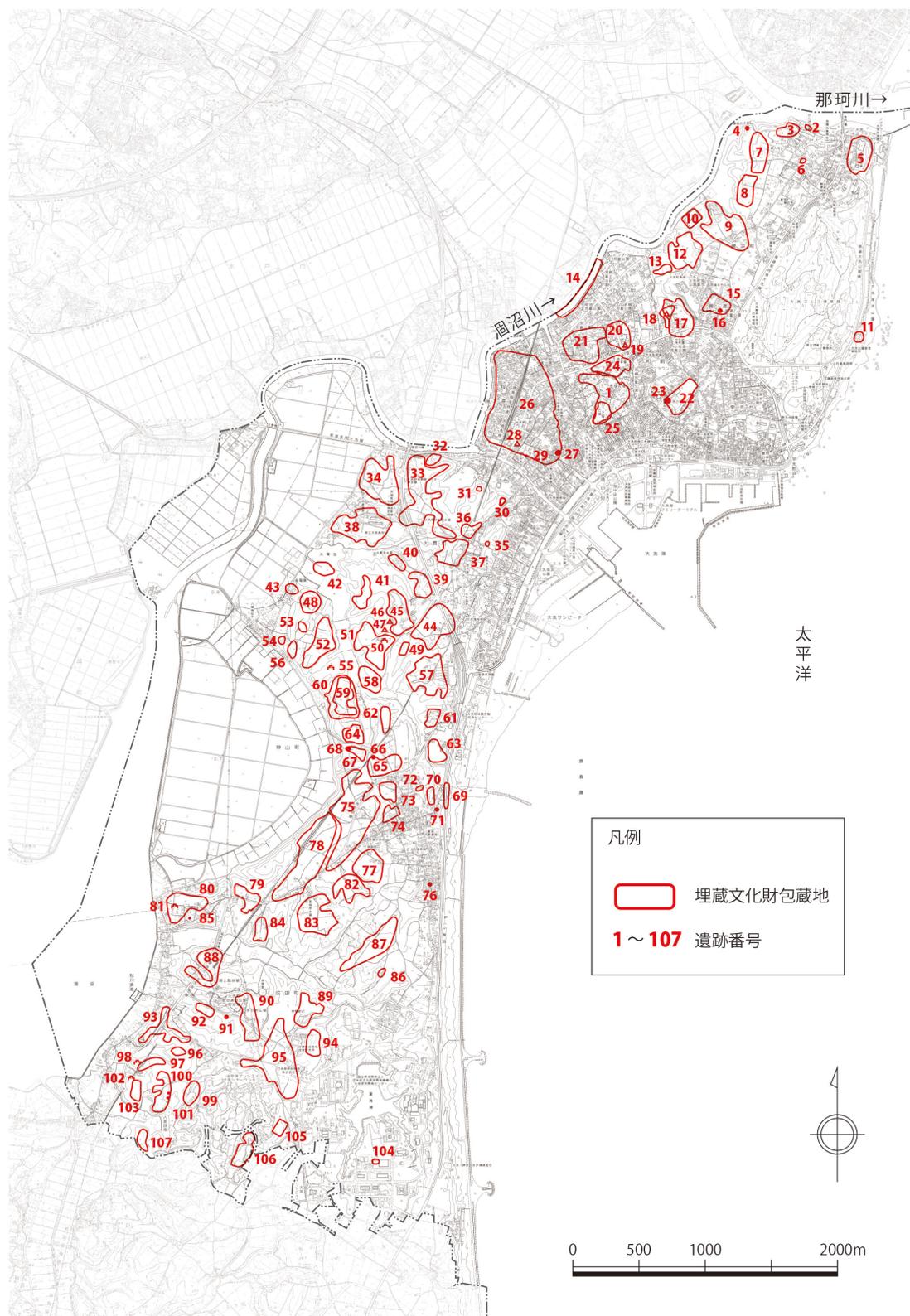


図 2-13 大洗町内遺跡の分布

されている。地点ごとに形成時期が異なり、前期関山式期の A 地点と中期～後期初頭の B～D 地点間で、貝類組成に変化がみられる(佐藤 1968、上川名 1972、藤本(弥)1977、宮田 1979)。台地上には該期の集落跡である吹上遺跡が占地する(藤本(弥)1977、宮田編 1977)。調査を実施した千天遺跡やおんだし遺跡からは、中期中葉～後期初頭の竪穴建物跡や土坑が多数検出されている(井上 1975、村田編 1980、井上・植田・松橋 1980・1982)。大洗町南部の千天遺跡第 46 号土壙の覆土中には、外海岩礁域に生息する貝類がブロック状に包含されており、必ずしも地先ではない大洗海岸からの採捕がみられた(植田・井上・松橋 1982)。後期前葉～中葉の大貫落神北・南貝塚の両貝塚は、7 地点の斜面貝塚あるいは遺物包含層から構成され、外海に生息するチョウセンハマグリなどの採捕が特徴的である。各地点、各層は細かく細分されており、動物遺体の内容に変化がみられた(藤本(弥)1980c、井上・金子 2000a・2000b)。貝塚直上の常福寺遺跡第 I 調査区には当時の集落跡が形成されている(井上・蓼沼 2001)。一本松遺跡からは後期前葉～中葉の建物跡と共に、晩期前葉の B 地点貝塚を検出した(藤本(武)1994b、蓼沼 2000、井上・馬目・宮田 2001)。

弥生時代の遺跡は、髭釜遺跡(26)、一本松遺跡(21)、団子内遺跡(20)、米蔵地遺跡(24)、長峯遺跡(38)等が所在する。髭釜遺跡は約 7.6ha におよぶ広大な遺跡であり、4 次に及ぶ発掘調査を実施したものの、鹿島臨海鉄道敷設工事や桜道土地区画整理事業により多くの範囲が破壊を受けてしまった。昭和 24 年には後期後半十王台式期の貝塚が調査され、その後、鹿島臨海鉄道敷地内の第 30・56 号建物跡からも弥生時代後期の貝類・魚類・獣類遺体が出土している(井上・宮田・杉浦・福田 1975・1976、井上 1977、井上 1980、藤本(武)1991、井上・宮田 1999)。一本松遺跡・団子内遺跡・米蔵地遺跡の 3 遺跡については、一本松遺跡群と呼ぶべき本来切れ目なく連続する集落跡であって、後期を主体とし一部に中期の遺物も出土する(井上 1969、藤本(弥)1983、井上 1987、藤本(武)1994b、井上・馬目・宮田 2001)。髭釜遺跡及び一本松遺跡群については、磯浜古墳群築造と連動する動向がみられるので、後節「弥生時代～古墳時代の周辺の遺跡」で詳述したい。長峰遺跡は昭和 48 年の大洗高等学校建設に伴って後期前半の建物跡 17 棟が検出されている(井上 1973)。当時茨城県内において弥生集落の構造が明らかとなった報告例は無かったため、重要な事例と考えられた。

磯浜古墳群を除いた古墳時代の遺跡としては、髭釜遺跡(26)、一本松遺跡群(一本松遺跡(21)・団子内遺跡(20)・米蔵地遺跡(24))、常福寺遺跡(45)、吹上遺跡(17)、長峯遺跡(38)、落神遺跡(41)、千天遺跡(75)、ヨナ川遺跡(88)等が確認されている。古墳(群)については、磯浜古墳群を並行、あるいはその直後の動向であるため、後節「大洗町の古墳・古墳群」で一括しやや詳しく述べることにする。髭釜遺跡及び一本松遺跡群については、前期・後期を中心とした竪穴建物や方形周溝墓が展開するが、磯浜古墳群直下の集落であり動向が重要であるため、弥生時代集落と共に後節「弥生時代～古墳時代の周辺の遺跡」で詳しく述べたい。常福寺遺跡からは前期・後期を中心とした竪穴建物 44 棟が発掘調査されている(井上 2000)。吹上遺跡(宮田編 1977)・長峯遺跡(井上 1973)・落神遺跡(井上 2001)・千天遺跡(村田編 1980)・ヨナ川遺跡(中村 1991)でも複数の竪穴建物が発掘調査されており、町域の広い範囲に集落が存在していることが確認されている。

磯浜古墳群保存活用計画 第2章 磯浜古墳群の概要

番号	遺跡名	よみがな	所在地	種類	現況	時代													
						旧石器	縄文	弥生		古墳			奈・平	中世	近世				
								前期	後期	前期	中期	後期							
1	磯浜古墳群	いそはま	磯浜町2865-8 外24筆	古墳群	山林					○	○								
2	祝町I遺跡	いわいまちいち	磯浜町7987	包蔵地	荒地		○												
3	ドンドン山遺跡	どんどんやま	磯浜町7986-2	集落跡	宿泊施設	○	○	○	○										
4	磐船山古墳	いわふねやま	磯浜町7918-8	古墳	山林									○					
5	祝町向洲台場跡	いわいまちむこうず	磯浜町8179-1外	台場跡	山林・宅地														○
6	祝町II遺跡	いわいまちに	磯浜町7986-25	集落跡	宅地		○												
7	磐船山遺跡	いわふねやま	磯浜町7896-6	集落跡	畑	○	○		○					○					
8	二葉町遺跡	ふたばちょう	磯浜町7753	集落跡	畑		○		○	○	○	○	○	○	○				
9	前坪遺跡	まえあくつ	磯浜町6316	集落跡	畑				○					○	○				
10	二葉町下養鰯所遺跡	ふたばちょうようまんじょ	磯浜町7226	包蔵地	荒地		○	○	○										
11	大洗海岸遺跡	おおあらいかいがん	磯浜町8250	包蔵地	砂丘				○										
12	宮田遺跡	みやた	磯浜町6114	集落跡	畑				○	○				○	○				
13	宮田下遺跡	みやたした	磯浜町5772外	集落跡	畑地・山林				○	○	○			○	○				
14	濁溜川河床遺跡	ひぬまがわかしょう	磯浜町字中瀬向地先	包蔵地	河川		○	○	○	○	○			○					○
15	上ノ山遺跡	かみのやま	磯道52	集落跡	宅地				○					○					
16	上ノ山古墳	かみのやま	磯道60	古墳	公園									○					
17	吹上遺跡	ふきあげ	磯浜町5609	集落跡	畑		○		○		○	○	○						
18	吹上貝塚	ふきあげ	磯浜町5002-1	貝塚	山林		○												
19	白畑貝塚	しらはた	磯浜町3633-1	貝塚	畑地		○												
20	団子内遺跡	だんごうち	五反田161	集落跡	宅地			○	○	○	○	○	○	○	○				
21	一本松遺跡	いっぽんまつ	磯浜町3344	集落跡	荒地		○	○	○	○	○	○	○	○	○				○
22	釜堀遺跡	かまほり	磯浜町6694	集落跡	校地		○	○											
23	寺家上古墳	てらやうえ	磯浜町5311	古墳	校地・山林						○								
24	米蔵地遺跡	よねぞうち	磯浜町3446	集落跡	宅地				○						○				
25	望洋館・磯浜海防陣屋跡	ぼうようかん・いそはま	磯浜町2865外	城館跡	山林														○
26	髭釜遺跡	ひいがま	桜道301	集落跡	宅地			○	○	○				○					
27	行人塚古墳	ぎょうにんづか	磯浜町1113-1	古墳	山林										○				
28	勘十堀貝塚	かんじゅうぼり	桜道28	貝塚	宅地		○												
29	花池古墳	はないけ	大貫町字花池481	古墳	畑地									○					
30	富士山古墳	ふじやま	大貫町1817	古墳	山林									○					
31	ウツギ崎砦跡	うつぎざき	大貫町2004-1	城館跡	山林														○
32	船渡遺跡	ふなど	大貫町2284	集落跡	畑				○	○	○	○							
33	官女平遺跡	かんじょだいら	大貫町2186	集落跡	畑				○					○	○				
34	へろ内遺跡	へろうち	大貫町2562	集落跡	畑				○	○				○	○				
35	権現坂横穴墓	ごんげんざか	大貫町745-16	横穴墓	山林									○					
36	富士ノ腰遺跡	ふじのこし	大貫町1770	集落跡	畑				○						○				
37	寺ノ上遺跡	てらのうえ	大貫町1735	集落跡	畑				○	○	○			○	○				
38	長峯遺跡	ながみね	大貫町2908	集落跡	校地				○	○				○	○				
39	中丸平遺跡	なかまるたいら	大貫町3303	集落跡	畑		○		○	○	○	○	○	○	○				

表 2-2 大洗町内遺跡一覧 1

磯浜古墳群保存活用計画 第2章 磯浜古墳群の概要

番号	遺 跡 名	よみがな	所 在 地	種 類	現 況	時 代												
						旧石器	縄文	弥生		古墳		奈平	中世	近世				
								中期	後期	前期	中期				後期			
40	鬼窪遺跡	おにくぼ	大貫町3295	集落跡	畑				○	○	○	○						
41	落神遺跡	おちがみ	大貫町3446	集落跡	荒地		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42	一杯館跡	いっばいだて	大貫町4238	城館跡	荒地												○	
43	椿山遺跡	つばきやま	神山町1998-6	集落跡	畑		○		○									
44	中畑遺跡	なかばたけ	大貫町1572	集落跡	畑		○								○			
45	常福寺遺跡	じょうふくじ	大貫町3507	集落跡	荒地		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46	大貫落神北貝塚	おおぬきおちがみきた	大貫町3800	貝塚	荒地		○											
47	大貫落神南貝塚	おおぬきおちがみみなみ	大貫町3777	貝塚	荒地		○											
48	蛸内遺跡	はちうち	神山町1982	集落跡	畑		○		○	○		○						
49	飛城遺跡	ひじょう	大貫町1448	集落跡	荒地					○	○	○	○					
50	登城館跡	とじょうやかた	大貫町3738	城館跡	山林												○	
51	登城遺跡	とじょう	大貫町3744	集落跡	荒地		○		○		○	○	○	○	○	○	○	
52	天子遺跡	あまし	神山町1899	集落跡	畑		○	○	○		○		○		○		○	
53	前峯遺跡	まえみね	神山町2009	集落跡	畑				○									
54	長町遺跡	ながちょう	神山町2039	集落跡	畑				○									
55	龍貝館跡	りゅうがいやかた	神山町1685	城館跡	山林												○	
56	神山壩遺跡	かみやまはなわ	神山町2030	集落跡	畑		○											
57	栗林遺跡	くりばやし	大貫町1349	集落跡	畑		○				○	○	○	○	○	○	○	
58	古内遺跡	ふるうち	大貫町3667	集落跡	荒地		○											
59	後新古屋遺跡	うしろしんこや	神山町1694	集落跡	畑, 山林				○	○	○	○	○	○				
60	後新古屋館跡	うしろしんこやかた	神山町1697-1	城館跡	山林・畑地												○	
61	御中山遺跡	おなかやま	大貫町1194-3	集落跡	畑, 宅地		○				○	○	○					
62	稲荷前遺跡	いなりまえ	神山町1103	集落跡	畑		○		○				○	○				
63	矢場久保遺跡	やばくぼ	大貫町1208-5	集落跡	畑												○	
64	清瀬遺跡	きよせ	神山町1528	集落跡	畑				○	○	○	○	○	○				
65	天神西遺跡	てんじんにし	神山町1034-1	集落跡	畑		○		○				○	○	○			
66	神ノ下古墳	かみのした	神山町1741	古墳	山林									○				
67	神ノ前遺跡	かみのまえ	神山町734	集落跡	畑											○		
68	宮久保古墳	みやくぼ	神山町1047-1	古墳	山林										○			
69	夏海浜欠台場跡	なつみはまがけ	成田町4356-3外	台場跡	道路													○
70	今神遺跡	いまがみ	神山町1331	集落跡	畑						○	○	○					
71	塩見塚古墳	しおみづか	神山町1314-3	古墳	山林										○			
72	蒲沼遺跡	かばぬま	神山町1362	集落跡	畑		○				○							
73	田神遺跡	たがみ	神山町942	集落跡	畑		○			○					○			
74	保地畑遺跡	ほちばたけ	神山町882	集落跡	畑, 墓地				○	○	○	○	○				○	
75	千天遺跡	ちてん	神山町461	集落跡	畑		○		○	○			○	○				
76	下宿古墳	しもじゆく	成田町109	古墳	神社						○							
77	四反遺跡	よんたん	成田町399	集落跡	畑		○		○	○			○	○				
78	南藤太郎遺跡	みなみとうたろう	神山町339	集落跡	畑		○		○	○				○	○			
79	奥吾遺跡	よご	神山町110	集落跡	畑		○		○	○								

表 2-3 大洗町内遺跡一覧 2

番号	遺跡名	よみがな	所在地	種類	現況	時代										
						旧石器	縄文	弥生		古墳		奈良	中世	近世		
								中期	後期	前期	中期	後期	平	世	世	
80	旧陣屋遺跡	きゅうじんや	神山町4391	集落跡	畑			○	○	○	○	○			○	
81	松川陣屋跡	まつかわ	神山町4393	城館跡	畑											○
82	明後内遺跡	みようごうち	成田町642	集落跡	畑				○						○	
83	日中内遺跡	にっちゅううち	成田町578	集落跡	畑		○		○						○	○
84	大峯遺跡	おおみね	成田町1395	集落跡	畑					○	○	○	○			
85	旧陣屋古墳	きゅうじんや	神山町4337-3	古墳	畑地						○					
86	井戸ノ上遺跡	いどのうえ	成田町3753	集落跡	畑		○									
87	小出山遺跡	こいでやま	成田町997	集落跡	畑				○	○	○	○	○			
88	ヨナ川遺跡	よながわ	成田町1709	集落跡	畑		○		○		○	○	○	○		
89	神明社遺跡	しんめいしゃ	成田町字神明社2066-7	集落跡	山林		○		○					○	○	
90	椎木下遺跡	しいきした	成田町1622	集落跡	畑、公園		○		○					○	○	
91	椎木古墳	しいき	成田町1609	古墳	山林									○		
92	居尻遺跡	いじり	成田町1509-2	集落跡	畑		○		○	○	○	○	○			
93	成田塙遺跡	なりたはなわ	成田町2378	集落跡	畑		○		○					○	○	
94	猪ノ川遺跡	いのかわ	成田町2194	集落跡	駐車場		○		○					○	○	
95	おんだし遺跡	おんだし	成田町2209	集落跡	畑		○		○					○	○	
96	エモデ遺跡	えもで	成田町2361-1	集落跡	畑									○		
97	小館遺跡	こたて	成田町2456-3	集落跡	畑		○	○	○					○	○	○
98	小館館跡	こたてやかたあと	成田町2459-3	城館跡	山林											○
99	国屋遺跡	くにや	成田町3249	集落跡	ゴルフ場										○	
100	石塚遺跡	いしづか	成田町2953	集落跡	畑		○		○	○				○	○	○
101	石塚古墳群	いしづか	成田町2963-1	古墳群	畑地						○					
102	大館館跡	おおたてやかた	成田町2887	城館跡	山林											○
103	大館遺跡	おおたて	成田町2887	集落跡	畑				○						○	
104	仲野遺跡	なかの	成田町字仲野3476-2ほか	集落跡	山林		○									
105	館山館跡	たてやまやかた	成田町3306-1外	城館跡	山林											○
106	皿沼遺跡	さらぬま	成田町3104	集落跡	ゴルフ場		○		○						○	
107	太田山遺跡	おおたやま	成田町3017	集落跡	畑										○	

表 2-4 大洗町内遺跡一覧 3

奈良・平安時代の遺跡は、髭釜遺跡(26)、一本松遺跡(21)、米蔵地遺跡(24)、落神遺跡(41)、常福寺遺跡(45)、飛城遺跡(49)、寺ノ上遺跡(37)等が存在する。大貫台地開発に伴う発掘調査では、落神遺跡からは 28 棟、常福寺遺跡からは 74 棟、飛城遺跡からは 10 棟と、多数の建物跡が検出されており、鹿島台地平坦部に幅広く集落が展開する(井上 2000・2001)。登城遺跡(51)からは、奈良時代の漁網用の土錘の他、鉄製の鎌や刃先、10 世紀後半の粃の状態のイネが出土しており、漁業や稲作の生産活動の物証が出土している(井上・蓼沼 2001)。漁業の内、外洋砂底に生息する巻貝のダンベイキサゴを選択的に採貝していたことが、平安時代前期の常福寺遺跡や寺ノ上遺跡で判明している(井上 2000、蓼沼・金子・大津 2008)。涸沼川に面した米蔵地遺跡の平安時代前期の建物に投棄された須恵器の生産地を分析したところ、運搬しやすい那珂川中流域の水戸市木葉下窯ばかりではなく、常陸南部の常総の内海に面して水系が異なる土浦市新治窯跡からも少なからず運ばれてきていたことが判明し、

涸沼水系を經由して物資が集積しやすい背景が浮かび上がる（蓼沼 2013）。

文献史料もたどると、この地域の奈良・平安時代の人間活動はより鮮明になる。奈良時代から平安時代初頭の蝦夷征討に際し陸奥国への軍需物資の補給港として機能した『常陸国風土記』に登場する平津の遺称地は、髭釜遺跡・米蔵地遺跡を含む一本松遺跡群の涸沼川対岸、現在の水戸市平戸付近と考えられている（志田 1989）。平安時代前期の貞観 8（866）年以前には、那賀郡の山中で伐採された栗材が鹿島神宮に運ばれており（黒板編 1974）、經由地の記載は無いものの、平津には那珂川の河川交通を通して用材が集積する河口港としての機能もあったものとみられる。このような中、外洋に面して大洗磯前神社が創建されてくるのは、平安時代中期の斉衡 3（856）年のことである。

中世の遺跡は、一杯館跡(42)、落神遺跡(41)、登城館跡(50)、小館館跡(98)等、町南部の涸沼川水系の城館跡を中心とする。台地前面の一杯館跡は未調査のまま消滅した遺跡であるが、14 世紀末以降、大貫町に城を構えた千葉氏との関連が予測されている（江原・田中 1986）。その基部、落神遺跡の 15 世紀中葉～16 世紀中葉の第 1 号堀跡からは深身の内耳土器・播鉢・羽釜等が出土した（井上 2001）。二度にわたる発掘調査を経た 15 世紀後半を中心とする登城館跡は、堀溝に区画された複数の郭を持ち内部に掘建柱建物跡や地下式竈・竪穴状遺構などを配置した構造が明らかとなった（井上・蓼沼 2001、大賀 2015）。小館館跡は部分的な調査に留まるが、土塁・堀跡・土橋などが検出され、緑釉小皿などが出土している（寺門 1978、中村 1991）。

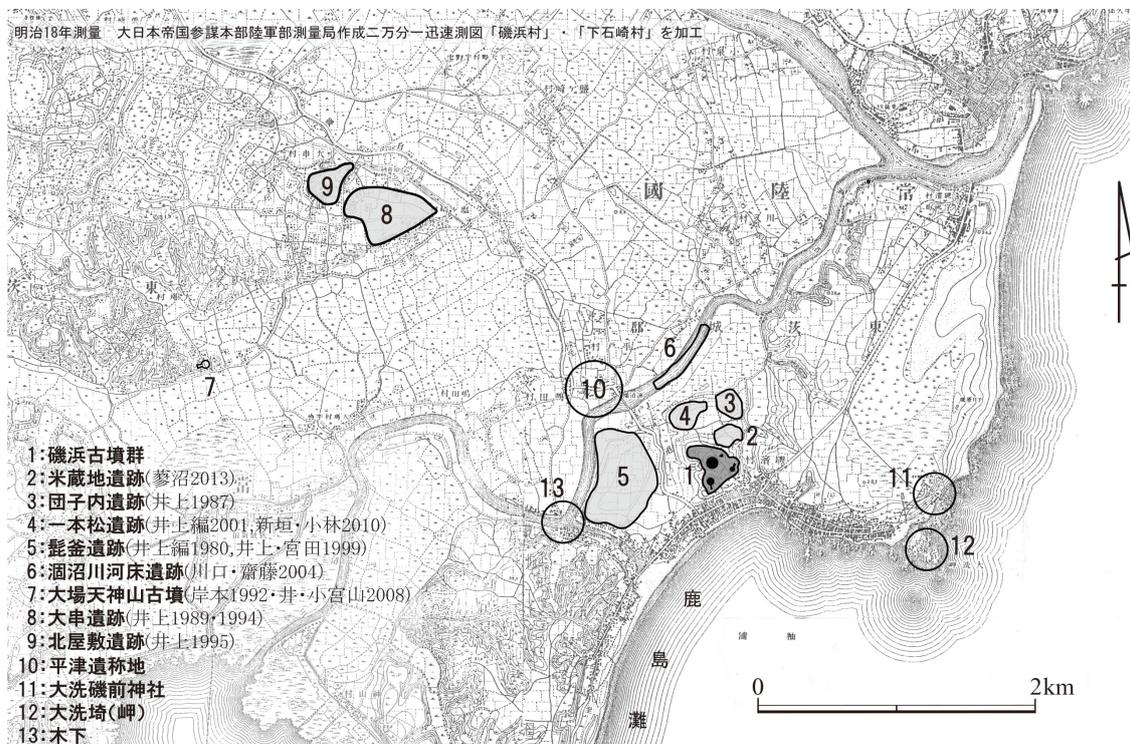


図 2-14 磯浜古墳群と周辺の遺跡等

大永6(1526)年の『亀山村不動堂勧進蔬』には、鹿島神宮や大洗磯前神社の修理に際し、「材を取る舟が木下の岸に着く」とあり、大貫町の涸沼川沿岸の木下に社殿の建材が集積された記録が残る(六地藏寺編1984)。この木下は、古代の平津とも近く、涸沼水系と外洋との間隔が最も狭くなる地点で、江戸時代中期に外洋と涸沼川とを開削して通水させた勘十郎堀を通した涸沼川側の基点となる場所である。那珂川涸沼水系の河口部の舟運の基点として木下が機能していたものとみて良い(藤井2021)。

磯浜町から大貫町の間、海沿いの街並みは、中世末から江戸時代前期頃に形成されており、海岸線と直交する幅の狭い路地は、当時からほとんど変わっておらず、日常の生活用であると共に、水揚げされた魚を加工場へ運ぶためにも使われた。古代以来、大洗磯前神社に献ぜられた神田に因んで名付けられた宮田村の村名が、江戸時代中期、外洋の磯を採用した磯浜村に変わってゆくのは、外洋に面する漁村の形成が作用したものと考えて良いだろう。

特に重要な近世の遺跡となっているのは、主に水戸藩・守山藩の海防目的の軍事施設、祝町向洲台場跡(5)、望洋館跡・磯浜海防陣屋跡(25)、常福寺遺跡(45)、松川陣屋跡(81)等である。望洋館跡・磯浜海防陣屋跡については、水戸藩沿海を異船から防御するために、9代藩主徳川斉昭により設けられた海防陣屋であり、天保年間に、日立市の助川館を中心に、友部・大沼海防陣屋の設置と連動する。水戸藩南端の鹿島灘を一望にできる、海の眺望が優れた適地を選択したところ、図らずも磯浜古墳群と同じ場所を選択することになった。磯浜古墳群の日下ヶ塚古墳と一体化した密接な遺跡であるため、後節「望洋館跡・磯浜海防陣屋跡」でやや詳しく記述しておきたい。

祝町向洲台場跡は幅約200mにもなる西洋式構造の砲台場で、現在も松林の中に遺構が良好な状態で遺存している。イギリスとの国際関係が悪化する中で、文久3(1863)～元治元(1864)年、那珂川河口の守りとして水戸藩が築造した(蓼沼2006)。常福寺遺跡からは円形・楕円形の粘土貼の墓壇10基が検出され、17世紀以降の第29号墓壇には側臥屈葬の人骨に38枚の銭貨が副葬されていた(井上2000)。松川陣屋跡は元禄15(1702)年から明治4(1872)年まで存続した守山藩の陣屋で、御殿・金蔵・稗蔵・火薬庫などの建物からなる。御殿跡の畑地には一部の礎石が残り、周辺からは18・19世紀の陶磁器類が採集される(中根1986)。

明治・大正・昭和時代になると、遺跡としては登録されないが、市街地の各所に、当時の遺構や遺物が少なからず残されている。海水浴場として機能した、明治末建造の磯浜築港の基礎は昭和50年代に埋め立てられたが、町割りの一部にその位置を判別できるようになっている。通勤・通学、観光の足として、水戸と大洗とを結んだ大正末～昭和時代前中期の水浜電車の線路跡は、大洗磯前神社の境内に残る旧大洗駅のプラットホームの遺構として、その面影を留めている。

(2). 古墳時代前期集落への変遷と方形周溝墓

この地域の古墳時代前期集落は、一本松遺跡群でまとまった棟数が検出されているが、髷釜遺跡が未報告で全体像は見えないものの、弥生時代後期の状況に比べれば極めて少なく

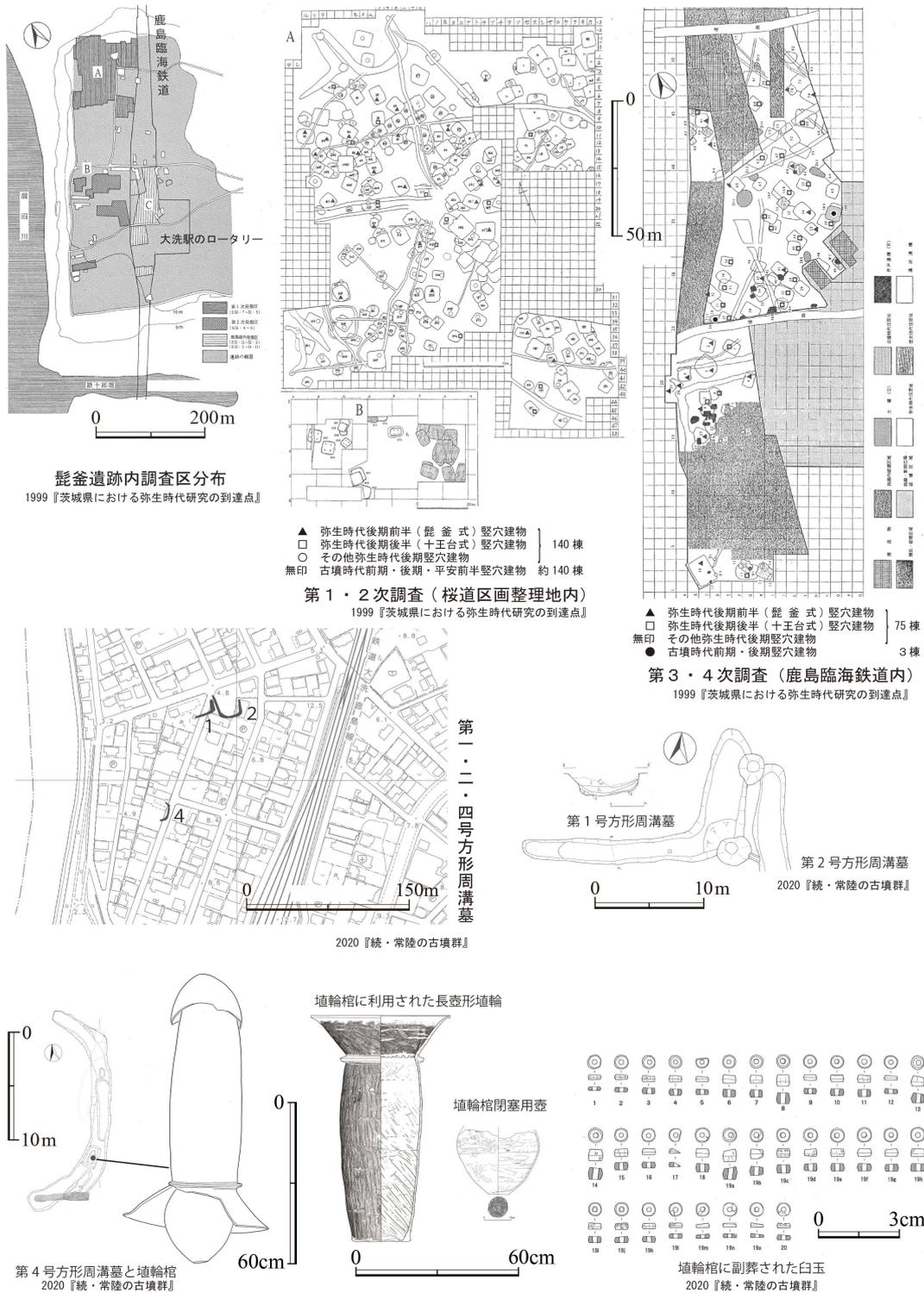


図 2-16 髷釜遺跡の遺構と遺物

なっているようである^{註2)}。一本松遺跡では、前出の後期弥生建物と重複して古墳時代前期の竪穴建物31棟が構築されており（井上編2001）、後期末に帰属する古墳時代への過渡的な様相を持つ建物も存在している。後期末の十王台式4期から同5期に移り変わる頃（鈴木

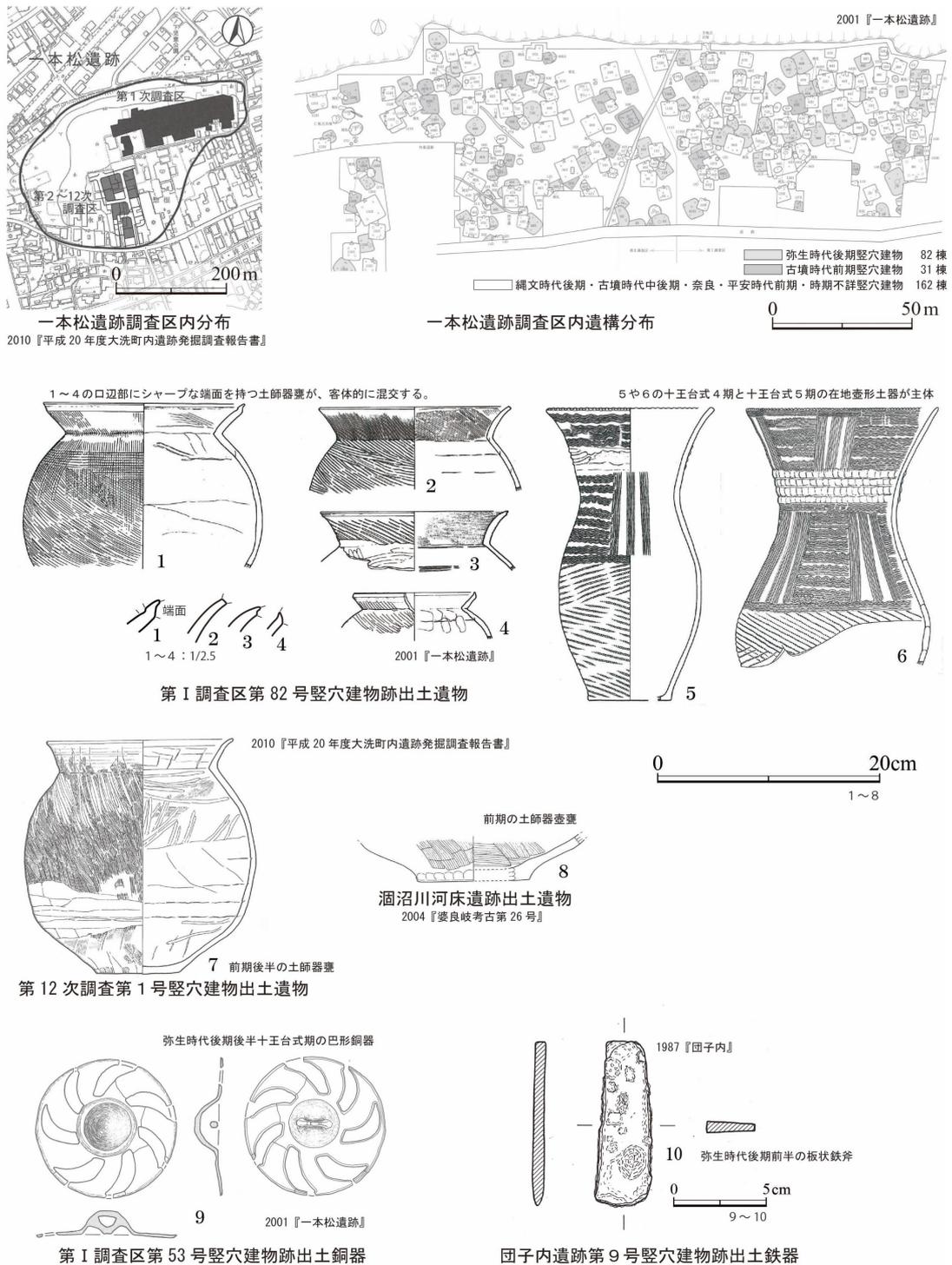


図2-17 一本松遺跡群の遺構と遺物

2013・2014) に帰属する第 I 調査区第 82 号建物跡では、十王台式土器との共伴関係から一部の土師器の受容が開始されるようである(蓼沼 2019)。以後 3 世紀後半～4 世紀代に前期集落が展開するが、前期前半～中頃に帰属する建物を中心とした報告であるため、前期の中での変遷は明確ではない。

それにしても倍ほどの期間、形成される弥生後期建物が 83 棟に対し古墳前期建物が 31 棟も検出されているということは、一本松遺跡においては古墳時代前期の期間、集住し続けていることを示している。この現象は一本松遺跡群を構成する団子内遺跡でも弥生後期 11 棟に対し古墳前期 4 棟、米蔵地遺跡では弥生後期 4 棟に対し古墳前期 1～2 棟(井上 1987、蓼沼 2014a) と比率が概ね共通する。一本松遺跡群における弥生後期集落から古墳前期集落への継続は、台地全面に及ぶものとみて良いだろう。

他方で、那珂川下流左岸、磯浜古墳群の北約 4.9km の台地縁辺に位置する三反田遺跡(川崎・鴨志田 1977・1979・1985、川崎・鴨志田・住谷 1978、川崎・鴨志田・千葉 1991、佐々木 2019、稲田 2019) では、前期前半～中頃の集落と方形周溝墓が展開し、同右岸の北西約 2.9km、図 2-13 の 8 大串遺跡や 9 北屋敷遺跡では、前期中頃から後半の集落が形成され、それぞれ新開地への移住がみられるようになる。墓域の把握されている那珂川下流左岸の下高井遺跡や涸沼水系右岸の南藤太郎遺跡を含め、那珂川・涸沼水系下流の沖積地を見下ろす台地前面には、弥生時代中後期以来の大洗低台地上の一本松遺跡群とは性格を異にする、縁辺に墓域を持つ前期集落が点々と分布することとなる。

集落は希薄化した髭釜遺跡の台地縁辺からも 3 基の方形周溝墓が検出されており(井上・宮田 1999)、その内、前期後半に帰属する第 4 号方形周溝墓の周溝内からは、日下ヶ塚古墳に樹立された長壺形埴輪と製作技法が共通するやや大きく作り分けた図 2-15 の埴輪棺が出土している(藤井 1976、井 2009)。墓域は遺跡の北西端に位置しており、その後継続する一本松遺跡と対峙する墓域であるのかもしれない。同時期の海を見下ろす高台地に築造される前方後円墳・日下ヶ塚古墳とは性格は異なるものの、製作を同じくする埴輪の利用に加え、副葬品には滑石製白玉 34 点が副葬されており、こちらも日下ヶ塚古墳粘土槨から出土した滑石製白玉との関連が考えられる。髭釜遺跡の方形周溝墓は、日下ヶ塚古墳に葬られた臨海的首長との関係を持つ被葬者と考えられ、三反田遺跡・下高井遺跡・南藤太郎遺跡などの那珂川・涸沼川下流域に築造されるその他の方形周溝墓とは埋葬様式に違いがみられる。

註 1) 髭釜遺跡から確認されている弥生時代後期の竪穴建物は、桜道区画整理事業に伴う第 1・2 次調査で約 140 棟(井上・宮田 1999)、鹿島臨海鉄道ルート内の第 3・4 次調査で 75 棟(井上編 1980)による。井上・宮田 1999 では 68 棟とも)、きらめき通りルート内の茨城県教育財団による第 13 次調査で 8 棟(天野 2017)、その後の試掘調査でも今日までに 2～3 棟発見されているから、総数は 225 棟程度にはなる。

註 2) 髭釜遺跡における古墳時代前期・後期・平安前半の竪穴建物総数で約 140 棟と報告されているが、その内訳は明確ではない(井上・宮田 1999)。大洗駅周辺の第 3・4 次調査区内においては、弥生後期建物 75 棟に対し古墳時代建物はたったの 3 棟であることや、その前の「(大洗駅西側の) 第 2 次調査区において(古墳時代建物跡は) 数例認められ、それは弥生時代のような密集した状態ではなく、その在り方は極めて散在的である」(共に井上編 1980 の 6 頁)とあり、髭釜遺跡で検出した前期の古墳時代の建物跡が極めて少ない状況にあることが理解できる。大洗駅東側のきらめき通りルート内でも状況は同じである(天野 2017)。

3-5. 前期古墳社会の海運ネットワーク

磯浜古墳群は、独立した400m四方の島状の台地に立地する。東は外洋に、西は内水面のそれぞれの海域に面していた。「海に面した山塊や丘陵、あるいは台地や砂堆などにつくられた」前方後円墳を指して、広瀬和雄により「海浜型前方後円墳」と名付けられた(広瀬2015)。海浜型前方後円墳は、古墳時代を通して列島各地で造られるが、磯浜古墳群と並行する前期に限ると、図2-17のような分布を示す。瀬戸内海両岸が多く、北部九州から関東地方にかけての日本海側や太平洋岸にも点々と分布する。磯浜古墳群の日下ヶ塚古墳も分布の東限に位置し、一翼を担っていることが注視される。同じく東端部に位置し内湾である東京湾と外洋の相模湾との分水嶺に占地する長柄桜山古墳群は、常総の内海(現在の霞ヶ浦・北浦沿岸等)から外洋航路で東北地方へ開けた日下ヶ塚古墳に重ねられてきた経緯がある(川西2002・

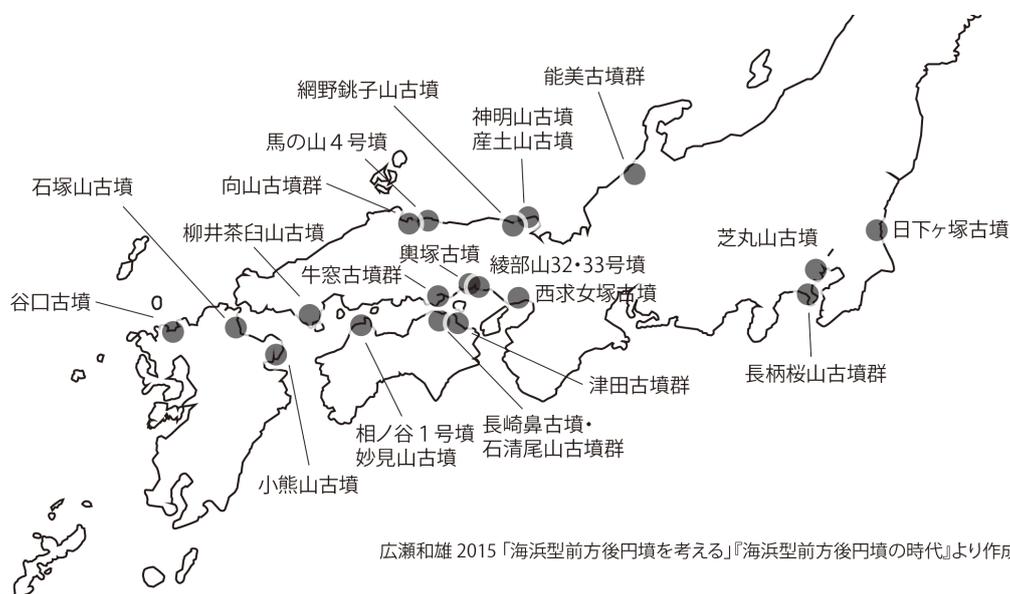


図2-18 古墳前期海浜型前方後円墳の分布

日高2002など)。

臨海性の前方後円墳を造営した首長層が、港津や海上交通を掌握していたという指摘がある(近藤1956・日高2002など)。この論に拠れば、港津には船の発着を通してモノやヒトが集散し、近郊の港間における交流やネットワークが形成され、臨海の首長間で海上交通網が確立していくことになる。

各臨海の首長は、円筒埴輪列や葺石を敷き詰めるなど、総じてヤマト王権との共通性を持つ、あるいは墳丘の規模が小さい階層性を備えた前方後円墳を築造していく傾向がある。臨海の首長間で進んだ海運ネットワークには、ヤマト王権の意志が深く関わっていたものとみて良いだろう。

以上のように、ヤマト王権を中核とした古墳前期に進んだ列島規模での海運ネットワー

クの整備・確立という社会背景は、その一角を占める磯浜古墳群の築造や被葬者像を考えていく際に、重要な位置を占めているものと考えられる。

3-6.常陸における海運ネットワーク

次に、前期後半、常陸における全長80m級以上の主要古墳の分布についてみておきたい。分布図を図2-18に示した。

臨海域の常陸の内海には、湾奥より湾口に向けて、90m級前後の^{おうつみ}王塚古墳、^{きはらあまのやま}木原愛宕山古墳、^{かどとづか}兜塚古墳、^{うしほりせんげんづか}牛堀浅間塚古墳、^{いせやま}お伊勢山古墳の前方後円墳が一定の距離を保って築造される。同時期、同規模の古墳の築造は、那珂川河口域の日下ヶ塚古墳にもみられる。6墳とも常陸の内海や外洋などに面しており、入り組む浦々間を結ぶ基

点となる場所であり、当時の港津付近とみなせる。内海・外洋の差はあれども、臨海性の立地という共通項を指摘でき、海浜型前方後円墳の範疇でとらえることができるであろう。

先にみた全国の傾向と同じく、ヤマト王権を中核とした海運ネットワークの進行が、常陸の内海を含め、日下ヶ塚古墳を取り巻く常陸においても形成されていたものとみられる。

3-7.常陸北部の前期・中期前半古墳

磯浜古墳群を取り巻く常陸北部の久慈川中下流域・那珂川中下流域・潤沼川流域における、時期的にも重なる前期～中期前半の古墳については、これまでに確かなものとしては28基が確認されている。その時期・墳形・全長について、図2-19にまとめた。なお、未確定の古墳や方形周溝墓は除外した。

前期前半（初頭～前葉～中葉）は、前方後方墳11基、前方後円墳2基が把握されている。前方後方墳11基は、30～40m級前後がすべてで、小型である。河川の中流域や河口域の潟湖沿岸に1～3基が分散して分布する。久慈川中流域の前方後円墳2基は共に100mを超える大型で、小型の前方後方墳とは隔絶した築造背景が読み取れる。^{ほんてんやま}梵天山古墳の前方部バチ形の平面形態や^{ほしじんじや}星神社古墳に伴う常陸初の埴輪の配置を含めて、ヤマト王権との強い繋がりが認められる。

前期後半（後葉～末葉）は、前方後方墳の築造はみられなくなり、前方後円墳8基に限ら



図2-19 常陸における古墳前期後半主要古墳

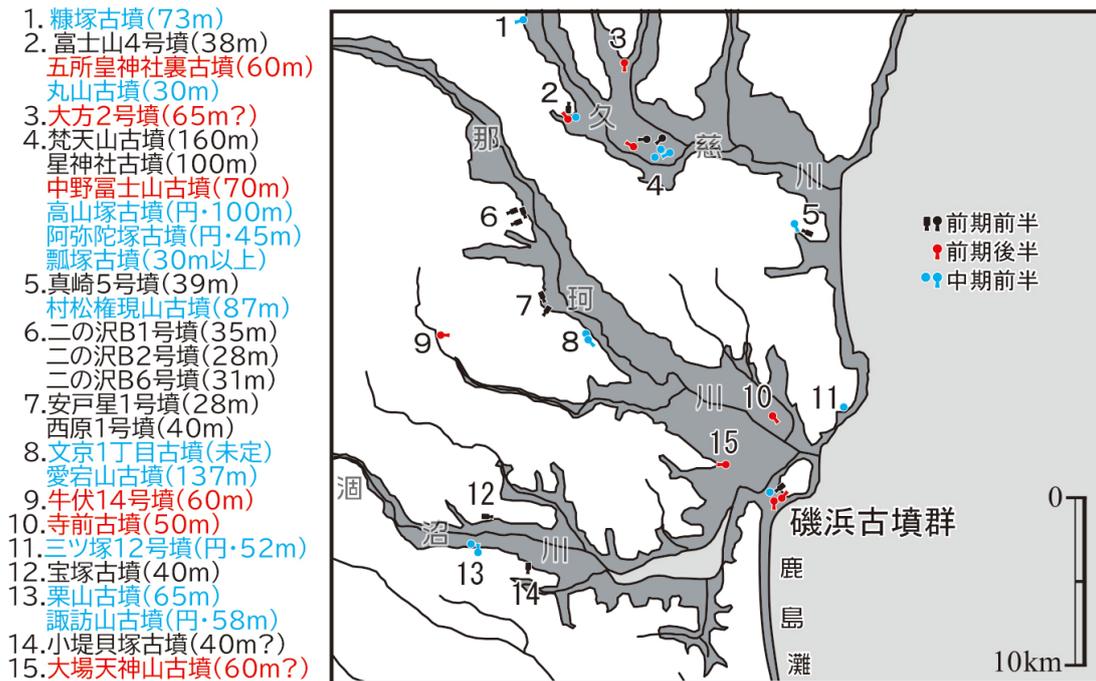


図 2-20 常陸北部の前期・中期前半古墳

れる。規模は50～70m級で揃う中、全長101mの日下ヶ塚古墳は別格の規模を持つ。前期前半に大型前方後円墳が築造された久慈川中流域では五所皇神社裏古墳(2)・大方2号墳(3)・中野富士山古墳(4)の3基が築造されるものの、規模は60～70mに減じている。他方で、那珂川・酒沼水系河口部の磯浜古墳群では、60m級の坊主山古墳を経て、海に面する100mを超える日下ヶ塚古墳の築造に至る。これは、先に述べたように、列島各地で進んだ海運ネットワークの確立に伴い、那珂川・酒沼水系の河口港の重要性が増したためと考えることができる。日下ヶ塚古墳の内水面側では、寺前古墳(10)や大場天神山古墳(15)も分布しており、『常陸国風土記』に登場する阿多可奈湖を囲むようにこの時期の古墳が分布しているものとみられる。阿多可奈湖は常陸北部の中心的な港津として、ヒトが行きかいモノが集積し、船積みされた様子が浮かび上がる。大場天神山古墳には列島最東端の三角縁神獣鏡が副葬されており、海運ネットワークで列島を繋ぐ際のハブとして、ヤマト王権がこの水域をいかに重要視していたか、分かるであろう。

中期前半(初頭～前葉)は、前方後円墳5基、円墳6基が築造される。那珂川河口域には、初頭の88mの大型円墳・車塚古墳を最後に、磯浜古墳群は終焉を迎える。中流域の137mの前方後円墳・愛宕山古墳(8)が、常陸北部の盟主墳となる。久慈川河口、潟湖の真崎ヶ浦に面する87mの前方後円墳・村松権現山古墳(5)は、格子タタキを持つ長壺形埴輪を樹立しており、王権とは異なる情報を共有している。この時期に造られる円墳は、40～50m級の中型が主体的である中、100mの大型円墳・高山塚古墳(4)が突出する。ヤマト王権による那珂川・久慈川両河川の中流域を重要視する姿勢を見て取れる。一方で外洋に面する三ツ塚12号墳(11)では、磯浜古墳群から伝統を持つ長壺形埴輪が遺存しており、先の村松権現山古墳と共に、海運従事者間では、異なる埴輪が採用された可能性がある。

3-8. 望洋館跡・磯浜海防陣屋跡

(1) 歴史

江戸時代後期から幕末期にかけての時期は、異国船が頻繁に沿岸に接近し、中には上陸して乱暴を働く事件が発生しており、その出没に対する危機感が強まっていた。特に水戸藩では攘夷思想を強く抱いた9代藩主の徳川斉昭が藩主に就任した天保年間になると、海防に対する積極的な対応策が講じられるようになる。北茨城市～大洗町間の藩内沿海の地に、海防陣屋や台場などの複数の海防施設が築造される。磯浜海防陣屋は、そのような沿岸領地の最南端に位置し、水戸城にも通じる磯浜村や大貫村を防御するために建設された。磯浜海防陣屋には藩士が詰め、沿岸に接近する異国船や上陸しようとする異人を監視し、大筒を備えいざという時に砲撃できる武備を備えていた。

磯浜古墳群中、日下ヶ塚古墳と重複する台地南縁一帯が該当し、古墳とは主軸の異なる遺構が残存している。この高台に登ると、磯浜町市街地から大貫町の市街地を介して鹿島灘沿岸を一望にでき、正に異船を監視するためには、好適地が選択されている。

本陣屋は、慶応年間に製作された国立歴史民俗博物館所蔵の『水戸天狗党絵巻』にみるように、「磯之濱御臺場」とも表記され、現在も古老を中心に通称として「おでいば山」「おだいば山」とも呼ばれているのは、この名残とみられる。

(1)-1. 第1期 (文政8年～天保7年)

文政8(1825)年、幕府によって出された異国船打払令に呼応して、水戸藩により異船を監視するための遠見番所が、領内沿岸の川尻(日立市)・河原子(日立市)・磯浜の3ヶ所に設



図 2-21 元治元(1864)年の磯浜海防陣屋跡

(出典：国立歴史民俗博物館「水戸天狗党絵巻」)

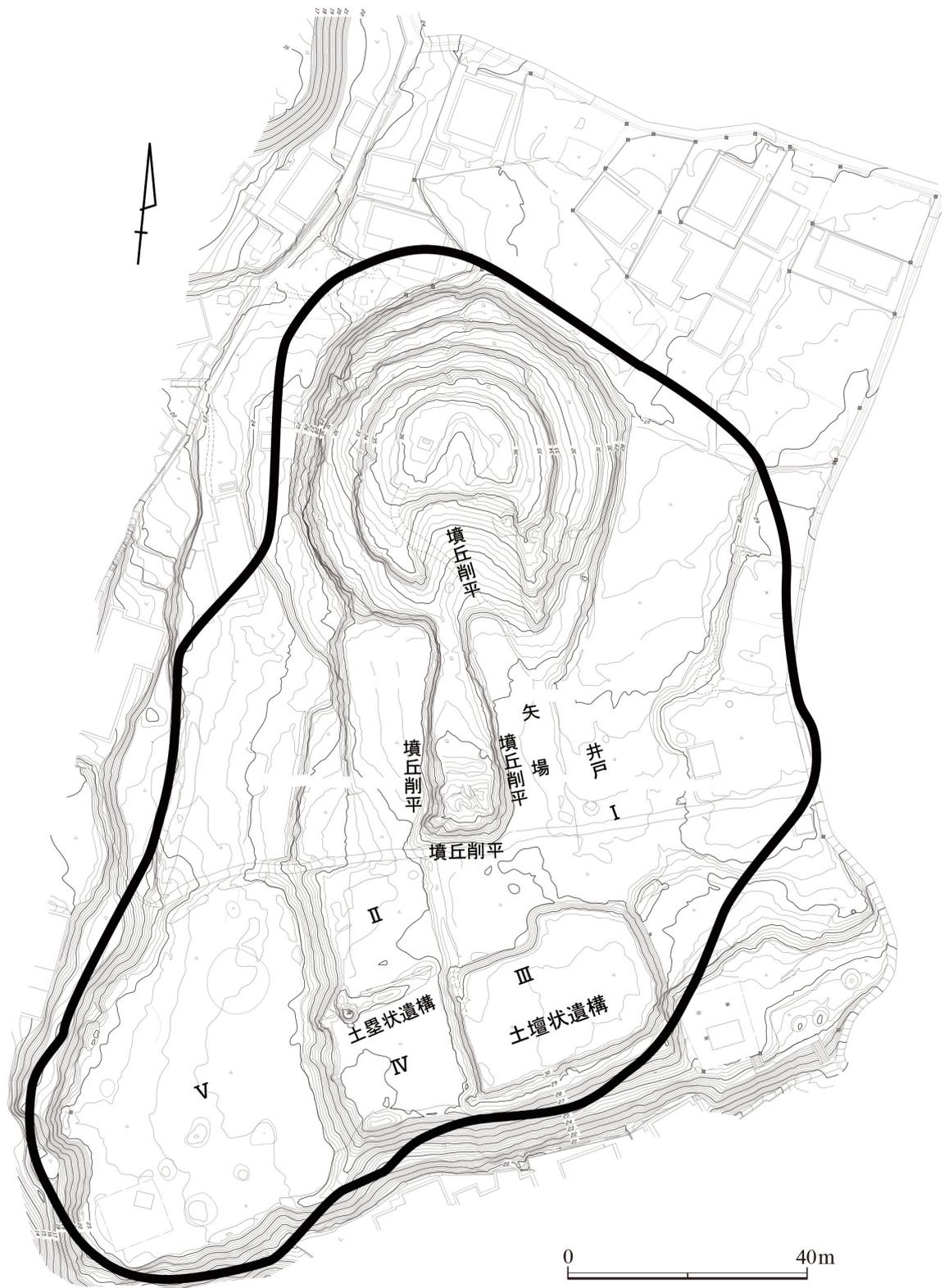


図 2-24 望洋館跡・磯浜海防陣屋跡

置された。この中で、磯浜の遠見番所は、別名望洋館とも呼ばれた。

郷士である小泉伝三郎が海防差引役を務め、後に須藤弥十郎・後藤友右衛門・桜井彦十郎ら郷士も加わり、配下には海防農兵(郷足軽)数十人を配属し、武器類も配備された。

(1)-2.第Ⅱ期(天保7年～天保13年)

天保7(1836)年、水戸藩主徳川斉昭は、藩士を沿岸に土着させる海防体制の充実を図る。具体的には、水戸藩家老の山野邊義観を沿岸北方の助川館に移住させ、日立市域の友部や大沼に海防陣屋を建設する。また湊村の和田には、那珂川河口の防御を意図した異船を砲撃する軍事施設である和田台場を築造した。

磯浜でも、それまでの郷士・郷足軽が解任され、海防指引役に藩士である大関恒衛門が任命され、その配下には先手同心組が配属された。天保10(1839)年には、車仕掛の五百匁玉御筒3挺と1挺あたり10発、計30発の弾薬の配備が計画されている。

(1)-3.第Ⅲ期(天保13年～元治元年)

海防指引役を廃止し、先手物頭が配属されるようになり、友部や大沼と同様の海防体制が整う。実際に天保13(1842)年11月までには、先手物頭1人、先手同心20人、与力2人、足軽10人の人員と共に、大砲3挺が配備されている。元治元(1864)年までの約22年間の間に、三木孫大夫・岡野庄五郎・谷佐之衛門・鈴木莊蔵らが先手物頭として派遣されている。『水戸天狗党絵巻』は、元治元年の元治甲子の変(所謂、天狗諸生の戦)により戦場と化した時の様子を描いた絵巻であるが、戦火によって複数表現されている海防陣屋の建物は焼失してしまう。

(2)遺構

範囲内は、南北に並ぶ日下ヶ塚古墳の墳丘とⅢ土壇状遺構(東西約36m×南北約24m、高さ約1.5～2.8m)を最高所とし、西方の土塁状遺構・区画溝で区画されるⅡ・Ⅳから、Ⅴへ向けて3段に下降する構造を持っている。その広がりには東西約110mであり、北西側から全景を描いた『水戸天狗党絵巻』と同様の構造を確認することができる。古墳の前方部三方、及び後円部南方が削られているが、明治前期の迅速測図にはすでに表現されており、江戸後期の海防陣屋の築造に伴い削平された姿を残していると考えられる。海防陣屋の範囲では、近代以降の改変をほとんど受けることなく、上記のような近世遺構が遺存しているものとみられる。

(3)遺物

古墳前方部から土壇状遺構にかけて、18世紀第二四半期以降に生産流通した軒棧瓦・棧瓦・軒丸瓦・丸瓦・平瓦の破片を表面採集することができる(蓼沼2004)。また、平成24年度に実施した日下ヶ塚古墳の範囲確認調査により、Ⅰの範囲に設定した第2・10号トレ

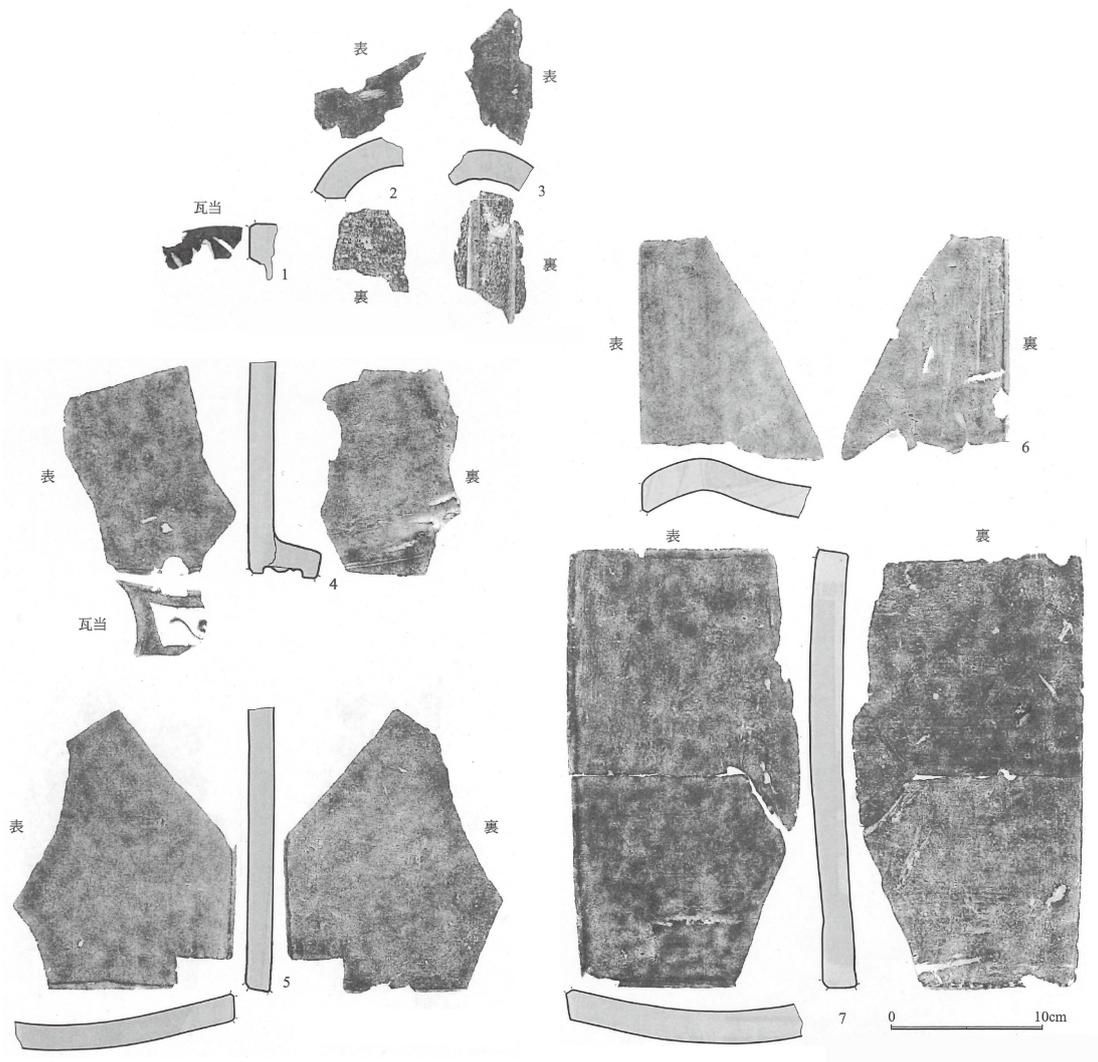


図 2-25 磯浜海防陣屋跡出土瓦
 (出典：『郷土文化第 45 号』)

ンチ内からは、道路状遺構 1 条・溝跡 2 条・整地遺構の遺構の他、陶磁器・土器・瓦片・銅製煙管のほか、鉛製弾丸などの江戸時代の遺物が集中する層位があり（大洗町教育委員会 2019）、望洋館時代から磯浜海防陣屋時代に伴う遺構・遺物の可能性が高い。